

プロローグ（―世紀末日記より抜粋―）

2×××年×月×日

宇宙人がやってきてから、もう数十年が経つ。猫がにやーと鳴くのは、古今東西あらゆる文明において真つ当なことであり至極当然のことであつたが、彼らはそういった普通のことを、いとも容易く奪い取つていった。もちろん抵抗した国もいたし組織もあつた。

どこかの世界随一の軍事大国は、まるで猫をいたぶる犬を止めるネズミのように彼らと戦おうとした。ある地域の経済連合も果敢にそれに続こうとした。それ以外の国と地域もどうにかして彼らを打ち破ろうとした。

だが、それは失敗に終わった。彼らの方が一枚も二枚も上手だつた。我々は、すっかり滅びゆく星の住民へと成り下がってしまった。

矢来 篝

「おーい、宇宙人が来たぞー、宇宙になれ！」

やれやれ、宇宙人が来てしまった。今日の日記を書くのも終わりとしよう。まだ私は宇宙になりたくない。

2×××年×月○日

私は宇宙人と同居している。そういつても私の古い友人たちは何の反応も示さないだろう。彼らは、使い古しのオモチャを目の前にした猫のようにそっぽを向いて黙るだろう。にやーともいふともいふまいだろう。

**彼らは冷たいのだ。**

そんな薄情なヒトよりも、私は宇宙の方が好きだ。

何よりも彼らは熱い。私が常々持つている猫への愛情に匹敵するくらいだ。彼らのせいで地球温暖化は飛躍的に進んだと私は考えている。絶対に言えないけれど。

「おーい、宇宙人が来たぞー、宇宙になれ！」

やれやれ、宇宙人が来てしまった。今日の日記を書くのも終わりとしよう。まだ私は宇宙になりたくない。

3×××年×月□日

**神は死んだ。**

遠い昔の哲学者だか何だかは、そう言った。

そして私は神を信じている。

この二つの事項は、あるいは相反しているように見えるかもしれない。しかし、おそらく両立しえる。

ならば、このようにも言えるのではないだろうか。

**猫は生きている。**

私は、そう言った。

そして宇宙人は猫を信じていない。

やれやれ。

追記…（これ以降は再現不可能、乱文等のため）

## 1. 紙飛行機の夢は遙か彼方へ

おじさん、と初めて呼ばれたのはいつ頃だったろう。ふと、そんな老けた物思いに更けるような年頃になってしまった。

「あの頃の若さは取り戻せないが、まあやれることはやってきたんだから俺の人生、悪くないもんだ」と心の底から思えるような日々を送りたかったものである。やれやれ、まったく望んでいない、ただ金を稼ぐための仕事に朝から晩まで追われていた日々を子どもの頃の私が見たらなんていうだろう？

きつと――

そこで私は眠りについた。

\*

美術室はよく冷えていて、そこかしこから画材の残り香が匂っていた。蟬の声はガラス越しでもミンミンと聞こえ、それに引き寄せられるように外の景色を見てみると、校庭で野球部が練習をしていた。どこまでも空は青く澄み渡っていて、入道雲は海に浮かぶ山のようにどっしりと構えていた。

そう、季節は夏だった。

それも夏休みだ。あの頃の中学生といえば、友達と海を泳いだり山に登ったり家でゲーム三昧をして、あとは夏祭りで盆おどりを披露したりなど、それぞれが学校の集団生活から解放されて自由に過ごせた人が多かったはずだ。もしかしたら有力な運動部はハードだったかも

しれんが、そんなことは万年文化部が知るよしもないことだった。少なくとも、美術部員の一人は快適な日々を送ることができていた。

彼は木製の椅子に座っていた。木製の机、普段は六人程度が使う、には既に数十種類の色鉛筆と一冊のノートがあった。彼は人を描かず、いつも動植物や家や煙を描いていた。その中でも彼なりの拘りがあるようで、いつも犬と植物は雑に描き、鳥を克明に描いていた。家は見る者に「これは家だ」と認識させることができれば何でもよいといわんばかりのクオリティで、その代わりに煙を誰よりも丁寧に描いていた。

その日は猫の気分だったらしく、ただし色鉛筆には全く触れずに、ただ一本の黒鉛筆で真っ白なノートに猫を形作っていた。煙は描かなかった、というよりは描けなかった。部活動の時間が終わったためだった。

\*

動物の毛の触感で目が覚めた。とても懐かしい夢に浸っていた気がするが、ひとまずは体の上の宇宙人をどかせねばならない。

宇宙人、今は人間と猫の間のような姿を取っている、の額に握りこぶしをコツンとやって俺が起きたことを知らせる。すると宇宙人は起き上がって、どこかへ去っていった。おそらく故郷の学校に行ったのだろう。地球の文明が六日で壊れたのとは対照的に、宇宙人の文明は進んでいるし、よく持ちこたえている。何百万光年をコンマ一秒で移動できるなんて、どれくらいの時と知恵があ

れば可能になるだろうか。ゆるりと惑星の死を待つことしかできない俺には、よくわからないことだ。

朝食はドッグフードだった。

宇宙人が攻め寄せてから二年と六カ月が経ち、いよいよ干し肉の腐ったような味にも慣れつつあった。もう消費期限が切れているため、本当に腐っているかもしれないが飢えるよりはマシだ。ただ、いまや水が2ℓのペットボトルの半分しか残っていないため、そのときは近いのだろう。また人間の食料は既に底を尽き、あとはどこぞの飼い主がペットのために備えていた一袋しかないのだから。

\*

彼は絵を描くのをやめた。

絵が嫌いになったのではなかった。彼は美術館にたまるに通っていたし、誰かが絵を描いているところを眺めるのは好きだった。

それでも高校生になると絵は描かなくなった。彼が通う高校にも美術部はあったが、何かが違う気がして入らなかった。そして他の部活動にも所属しなかった。

私がドッグフードを食べることになった元凶は、ちょうどその頃に世界中の話題となっていた。

人類は無限のエネルギーによって更なる飛躍を、とニュース・キャスターが読み上げていたことは昨日のことのようだ。あれに懸念を表する有識者もいたが、あれの実用性の前には無力だった。どこの誰が、全ての物質に変容可能で（しかも無限の！）エネルギーを既存の設備

で自由自在に取り扱えるのに放っておけるだろうか？

そんな時世だから、彼も未知のエネルギーについて多少は知っておこうと思つたらしい。新聞を読み、ときにはエネルギーに関する本も読むことで、あれへ彼なりに決着をつけようとした。が、もし未知のエネルギーもエネルギー保存の法則に従うのなら、どこからかはエネルギーを獲得の难道うということしか分からずに彼の夏休みは終わろうとしていた。

そして彼は、ゆらゆらと煙が地球から孔へ向かつていく絵を夏の終わりに描いた。彼はノートと鉛筆をダンボールから取り出すと、食事を忘れ、一つの夜を越え、その絵の完成に打ち込んだ。特に煙への熱の入れようは凄まじく、人が一分で終わらせる所を一時間も掛ける有り様だった。

だが全て描き終えると合点がいったのか、これが継ぎ目越しに描かれた二枚の紙をノートから切り離し、それぞれ近所の河川敷で処分した。一つは屋形船にして川へ流し、一つは紙飛行機にして飛ばした。その頃は、どちらも川へ溶けたのだろうかと思っていた。

ようやく表紙と裏表紙のみとなったノートは、翌朝に燃えるゴミとして回収された。それ以来、私は絵を描いていない。

## 2. ただの砂と化す星よ

私は自らの死を身近に感じるようになってから、その日の出来事などを、この地下倉庫に一冊だけあったノートに、これまた倉庫内に一つだけあった鉛筆で纏めるようになった。このノートの題名は特にならない。もし誰かの手に渡つたのなら、その人(?) がテキストに付けられないと思う。誰かの手に渡るにせよ渡らないにせよ、日記の形を留めない可能性の方が高いだろうが。

もともと、その日の出来事よりも、その日の私の思考や過去の出来事の方が書く頻度は高いため、この時点で日記ではなくなっているのだろう。

昼食のドッグフードを食べると、なぜか「おーい、宇宙人がきたぞー、宇宙になれ！」と言つてから、やつてくるはずの宇宙人が既に隣にいた。どうしてと私が聞いても、宇宙人は何も答えてくれなかった。ただ、隣にいただけだった。

私は宇宙人と初めて会つた日を思い出していた。

\*

全てが不毛な砂に化そうとしていた。

木々も海でさえも砂になっていき、そこを居住地としていた生き物も砂になっていく眺めをテレビの中継映像で見て、彼は困り果てていた。

「こんな世の中だが、うーん会社に行く意味はあるのかなあ。どこに営業かけても金融商品なんか誰も買わんだらうしなあ」みたいなことを呟いていた。ただでさえ無

限のエネルギーのおかげで全ての人々は物質的に何にも困ることはなくなり、従来の保険業は一部の極度に心配性な人だけが得意様だった。最近是非物質的な保険——たとえば恋愛保険など——の売れ行きで社を維持できていたようだが、こうなつてはもう先はないと彼は考えていた。いや今は無限のエネルギー源がなくなつていないため、もしかしたら、この騒動後の未来を考へるようになつていくことで顧客に商品売りつけていく営業マンもいるのかもしれないが、もはや彼の知つたことではなくなつていた。

彼は家から食料を積み込めるだけ車に積み込んで、どこかへと当てもなく旅することに決めた。いま振り返ると、新聞等のマスメディアやインターネットのSNSから情報を得た方が無難だったのではないかと思うけれども、とはいえ現状に後悔はしていないから、これで良かったのだと私は思っている。

旅の当初は交通渋滞が頻発したため、どこへ行こうとも思うように進まなかった。たった一〇キロメートルを走るのに一日もかける日もあったくらいだ。なんだか馬鹿らしくなつて、いつそのこと歩いた方が速いのではないかと何度も考えた。ただ食料が惜しかったため考えるだけであつたが。

彼は、とりあえず北を目指した。東海へは渋滞が酷かつたから止めて、北陸へは何となく行きたくないと考へていた。たぶん太平洋側でずっと育ってきたために、まったく縁のない日本海側の水は馴染まないとも思つていたのである。彼に東北・北海道の水が合うとも思えないが、とにかく彼は北海道の最北端に行ければ楽しそうだなと愉快な旅を行う心持ちで北へ向かつた。

まだ旅から一週間も経たないうちはガソリン・スタンドが残っているとところもあったので、そこを一つの中継地としつつ、ずっと北へ向かっていた。たまに渋滞に捕まることもあったが、これを除けば順調な旅路だった。

岩手県の一関を出ると砂が目立つようになった。どういわけか木や土だけでなくコンクリートまで砂と化していたため、砂漠の中を走っているような感覚で車の運転のコントロールが徐々にきかなくなっていく。また、さらに北へ行けば行くほど、車の残骸が燃えている景色が普通になっていった。これらはスピード超過によって衝突事故が派手に起きたためだった。彼は事故が起きた瞬間に何度も通りすがっていた。一関インターチェンジから約一八キロメートルほどの前沢サービスエリアに着くころには、全ての車外の景色が砂と化しつつあった。ところどころ盛り上がっているのは、かつて建物や車や人がいたところだろうか、と考へつつも昼休憩をとることにした。

昼食はコンビニのおにぎりサンドウィッチを二個ずつと、あんぱん一個だった気がする。お茶も適度に飲みつつの昼食だった。おそらく最後の晚餐だろう、と涙を飲みながら、体中の空気を声に変え遙か遠くのアンドロメダ銀河まで届けよと泣き叫びながら、あまりの恐怖で咀嚼の際に口内の肉も噛み千切りながらの食事だった。

食後の祈りを終えると、おにぎり等の包装をゴミ袋に入れた。車のエンジンはかけられなかった。既にアクセルが砂に変わっていたことから、その他の設備もダメになっっているのだろうと溜め息を吐いた。

おそらく砂や外気に触れた箇所から砂になっていく仕組みのようで、特に砂に触れている方が砂の進行は激し

いようだった。車の上部分にも徐々に砂が目立つようになっていったが、妙に直に砂と接した所よりも砂化の進みが遅かったのだ。

そのとき体は金縛りされたように動けなかったが、しかし内心は「こういうシチュエーションで死ぬんだから、やれやれこれまでかと煙草を一服しながら逝きたかったな」と死に際にしては我ながら呑気なことを考えていた。おそらく直前の昼食に心の覚悟は完了したのかもしれない。とにかく、そのときの彼はこんな死に方には納得できないと考へていたのだ。北海道の最北端には行っていないわけだし。

とはいえ、そんなことを考へていても状況が良くなるのは明らかだった。砂が上から隣の座席に。パラパラと落ちてきて、彼の唯一の足場であった椅子も崩れ始めたとき、ようやく彼は辺りの風景からどこか逃げ場がないかと探すことにした。

真っ黒の孔が目の前にあった。

まるで、ずっと前からそこにあつたと主張しているかのように違和感がなく、そこに孔が収まっていた。それが何であるかは直感的に彼は分かっていたが、その先に何があるかは見当もつかなかった。なにはともあれ、彼は目的を果たさずに死ぬのは真っ平ごめんだつた。

だから、彼は孔に飛び込んだ。

### 3. 誰が死せども猫は死なないよ

流れ星が頻繁に飛んでくる星だ。

彼の、その星への第一印象はそれだった。彼は真っ黒の孔から出ると、まず上を見たからだ。たとえ肉眼で見ることが不可能な距離だったとしても、満天の星空の内一つには故郷があると思つたからだ。

だが、彼は予想外の景色を見た。

小惑星が次々と、おそらく地表を目標に飛来し、これらが上空数千メートルのところへ急に姿を消すという景色であった。たまに彼に一直線に向かう小惑星もあったが、これも例外なく消えた。

しばらく放心していると、「おい。ごきげんよう。確か日本語の挨拶はこれで合つてたはずだけれど合つてるかい？ イエスかノーで応答お願いします」と宇宙人は背後から声をかけた。

これが宇宙人との初対面だった。

\*

それからは宇宙人に今の地球について聞き、その後は依然として砂になつていない地下奥深くの無人（となった）施設に飛ばしてもらつて、この日記を書き始めたのだった。そう、なぜ地球が砂の惑星に化しつつあるかという、宇宙人の住む星と別の星の間で戦争が起きているからだそうだ。

地球は双方から重要な資源の一つと、ある出来事で認知されるようになり、また、また——や彼らの星は

どに文明が技術発展に追いつかなかったためにターゲツトにされたのだという。この争いの末に宇宙人は地球を取ることになり、一方の別の星は太陽系の小惑星群を全て取ったそうだ。宇宙人によると(たとえ自分たちほどにないにせよ)文明が高度に発達している星は価値が高いらしい。私は地球の資源は人類によって大幅に消費されているため、数万以上の無名の星よりも一惑星の価値の方が高いとは思えなかったが。

ところで私は宇宙人に故郷を滅ぼされた。

だが、不思議と怒りは湧かなかった。それは最後の晚餐の時点で一度は生を諦めたからかもしれないし、あるいは資源のために滅ぼしたというところに心当たりがあったからかもしれない。

あとは宇宙人と猫について話したとき、宇宙人の反応が面白かったというのもある――、

\*

宇宙人がいつもの挨拶をした後だった。

私は「猫を知っているか？」と単刀直入に訊いた。すると宇宙人は「猫……？ かつて地球上にいた生き物の名前のようにけど、それがどうしたん？」と答えた。私は「猫は宇宙最強クラスにかわいくて、しかも自由気ままに道を歩き、その仕草は人の心を癒す存在なんだ。きみも猫になればわかるさ」と言った。

私の狙い通りに宇宙人は猫の姿になった。宇宙人は何にでも見た目を変えることができたのだ。宇宙人に猫に

なった感想を聞くと、「身軽だね。悪くない。でも、ボクはかわいいわげじゃないし、自由気ままでもない。人の心を癒す気もないから、君の言う『猫』の定義には当てはまらないと思うんだけど、どうなんだい？ ん？

……おい。笑っているな貴様」と語った。

猫が流暢に日本語を喋るだけで愉快なのに、さらに猫の正体が宇宙人なのだから、どうして笑わずにいられようか。

私は宇宙人の猫の姿へのコメントは「ありだね、ありがとう」と言うにとどめたが、もちろん十数年振りの猫だったので、とても嬉しかった。そんな私の心情を察したのか(宇宙人は存外に情に厚い)その日以来、宇宙人は猫と人の姿を日替わりで取り始めた。ときに猫と人の間の姿を取ることもあった。

\*

私は夕食に水を有りつたけ飲んだ。

宇宙人は隣にいなかった。私は今日の分の日記を書き終えて、ほっと一息ついていたが、まだ書いていないことがあることを思い出した。

鉛筆を三回落とした。ノートで次に書くべき所を見るけるまで十分はかかった。指の先の感覚が完全になくなる前に、あのことを宇宙人に言わなくてはならない。もっとも、私以外の人にとってはどうでもいいことで、きっと宇宙人にとってもくだらないことであろうが、それでも書かねばならない。

追記：君の中に猫は生まれたかい？ と。